

講義名	都市環境論		
科目区分	学部フリーゾーン		
担当教員	酒井 彰		
開講期・曜日・時限	前期 火曜日 3時限	授業形態	
履修開始年次	3年生	単位数	2
		備考	

主題と概要

我々の多くは、将来にわたって都市に住み続けることになるだろう。しかしながら、都市生活者の多くは、都市環境がいかに維持されているのかを認識せず、さらには都市環境そのものに対しても無関心である。そこに都市環境問題の根本原因があるように思われる。都市生活者の立場から、「都市環境」について論じていく。

まず、都市環境問題の歴史を振り返るとともに開発途上国における都市環境問題をとりあげる。これは、都市環境問題の認知が困難となっている現代日本の都市よりも、問題が顕在化し、その本質が理解しやすいためである。総じて、都市環境の主要な要素である水循環と水環境を取上げる。都市化による水循環の変化がもたらした弊害として、ここ数年毎年莫大な被害をもたらしている水害を含めて取り上げる。さらに、それからの都市環境を創造、維持していくため、まちづくりの潮流について議論し、併せて都市の環境保全、都市景観について取り上げ、地球環境問題や人口減少といった今日的課題のもとでの都市環境のあり方について議論する。

都市はさまざまな矛盾をはらみつつ、進化していく。その過程で、われわれ都市生活者が都市を利便性や効率性を求めるだけの場ととらえるのではなく、新たな役割を担う広義の生活の場に転換していくことが求められていくと考えられる。良好な「都市環境」は住みやすさを実感し、住んでいる都市に愛着と誇りをもつための基本である。

到達目標

自らの生活と都市環境との関係性に気付き、ライフスタイルに反映させるとともに、都市環境に関わるさまざまな課題に対して自らの意見を提案できる能力を身につけることが目標となる。そのためには、都市に生活することが都市環境とどのような関係性を有しているか、自分なりに考え、文章に表現することが求められる。

提出課題

講義内容理解のためのレポート・2回。レポートは採点のうえコメントを付し返却する。これまでの課題は「関心のある都市環境問題」、「水循環との関わり」、「まちづくりに参加して提案してみたい内容」など。第三者的な見方ではなく、都市に生活する当事者としての能動的で独自の提案を求める。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバック

レポートは、提出の翌週には採点、コメントを付し返却。採点にあたっては、自ら考えたことが反映されているに重点を置く。レポート返却後、採点基準、レポート内容の紹介、不十分な点、次のステップへのヒントなどを講評する。

評価の基準

平常点（講義への参加度）	20点
※毎回簡単なクイズを出題。不適切な回答の場合には出席とみなさない。	
レポート	40点
（コピペに対しては厳しく対処する）	
試験	40点

履修にあたっての注意・助言他

受講生に期待される到達目標を十分認識し学習すること。
自らの生活と都市環境との関わり（インパクトを与えるもの、受けるものとして）に気付く習慣をもつこと。

教科書
. 使用しない。

プリント資料及び参考文献

レジュメ、新聞記事等関連資料は講義時に配布。参考資料は必要に応じて提示。

- 授業計画**
- 1 都市環境問題 (1) : 都市にはどのような環境問題があるか / 戦後日本の都市環境問題の変遷
 - 2 都市環境問題 (2) : 高度成長期の都市環境問題
 - 3 都市環境問題 (3) : 開発途上国の都市環境問題
 - 4 都市水循環と水環境 (1) : 水の価値 / 都市水循環の変化ともたらされた弊害
 - 5 都市水循環と水環境 (2) : 都市型水害
 - 6 都市水循環と水環境 (3) : 都市気候の異変 / ヒートアイランド
 - 7 都市水循環と水環境 (4) : 水循環と水質問題
 - 8 都市水循環と水環境 (5) : 水質管理
 - 9 都市水循環と水環境 (6) : 保水型都市づくりと総合治水
 - 10 都市水循環と水環境 (7) : 都市の水辺
 - 11 持続可能な都市環境 (1) : コンパクトシティ
 - 12 持続可能な都市環境 (2) : 人口減少・高齢化とまちづくり
 - 13 持続可能な都市環境 (3) : 環境保全型まちづくり
 - 14 持続可能な都市環境 (4) : 都市のアムニティ / 都市景観 / 景観保全の取組み
 - 15 都市環境管理の担い手 / まとめと重点事項

授業形態（アクティブ・ラーニング）

ア：PBL（課題解決型学習）
イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
ウ：ディスカッション、ディベート
エ：グループワーク
オ：プレゼンテーション
カ：実習、フィールドワーク

準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習及び復習の時間は、講義内容に関する事前確認や下調べ、講義資料の事後確認に3.5時間程度、レポート作成には4時間を最低限として、より完成度の高いレポートを求める。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

実務経験の有無及び活用

備考